

常陸国風土記に記された蛇神信仰の説話

清水賢子

太政官から諸国の国庁に風土記の撰進が命ぜられたのは、元明天皇の和銅六年五月二日であった。

日本紀に

畿内七道諸国郡郷名者好字。其郡内所生。銀銅彩色草木禽獸魚虫等物。具録色目。乃土地沃墾。山川原野名号所由。又古老相伝旧聞異事。載于史籍。亦宜言上。

との詔があり、これによって、地方の各国が施行すべき事柄、政治経済的事柄、土地の伝承等に関する五項目の報告が規定されている。この「風土記」は、古代に於ける地方人の実生活、精神生活や地方伝承を知る上での最高史料となるばかりでなく、中央權威との結びつきを重要視して祖先伝承を語り伝えた地方豪族、そのような有力な地方勢力の征圧、吸収ということにおいて、その權威を語るうとした中央・大和朝廷という存在を考えた場合、その成立の過程で宮廷風に合理化された面があり、官撰という点では、古事記・日

本書紀と同じではあるが、国の公的な記録としての記紀が伝える宮廷伝承の調査を別の観点から補う史料としても重要な意味を持っている。

常陸国風土記が和銅六年の詔に基づいて編纂され、撰上されたものであることは、この風土記のはじめに

常陸国司解。由古老相伝旧聞事。問国郡旧事。古老答曰……

とあって、詔の意志を受けている点からみて、間違いないと考えられる。

ここでは、常陸国風土記に筆録された、詔の第四、第五項目「山川原野名号所由、又古老相伝旧聞異事」に相当する記事の中から、蛇神信仰の説話を取り上げ、各説話の内容を検討し、常陸国に於ける蛇神信仰の特徴を考えてみたい。

久慈郡、薩都里の賀毗礼の高峯の条に次のような記述がある。

松沢の松の樹の八俣に坐す立速日男命の祟りに苦しんだ住民の請願によって、朝廷から遣わされた片岡連は、この神を祭り神に移転を祈願したところ、神は祈りに応じて賀毗礼の峯に登った。この神の社は石で城を造り中には一族のものが沢山おり、色々の宝が石となって残っている。

この賀毗礼峯の記述について、岩波古典大系「風土記」(秋本吉郎校註)の註に、

山上につくられた古墳墓の由来に関する説話で、山上に中心となる古墳とともに古墳群のあることをいうのであろう。

としているが、これは説話の後半に囚われた見方で、説話全体を見るならば、本来二つの説話であったものが語り伝えられる過程、あるいは風土記編纂の過程で一つに統合されたものではないだろうか。

すなわち、片岡連の祈りに応じて神が賀毗礼峯に登ったという前半部は賀毗礼峯の地名起源を説いたものであり、後半は古典大系の註に言うように古墳群のあることをいう説話であった。そこで、この峯にあった古墳群が神の社にあてられることになったのではないだろうか。

この説話によれば、立速日男命には木の八俣に坐すというところからまず蛇神としてのイメージが感じられるが、他にも、表に示すよ

うに行方郡の蛇神・夜刀神とその性格の上で類似する点が多い。

	立速日男命	夜刀神
1.	松の樹の八俣に坐す	池の上の椎株に昇り集まる
2.	一族が沢山いる	群を率いてやってくる
3.	住民に災を示し、疾苦を与える	家門を破滅させ、子孫を絶やす
4.	折告に服従して峯上に鎮まる	武力に屈服して山上に鎮まる

また、これは蛇神として崇められた例で別格ではあるが、記紀に記された三輪山伝説の大物主神の場合にも、その姿は蛇で「大虚を三諸の山に去り」その山上に鎮まった。

このような幾つかの類似点から立速日男命は蛇神であろうと考えられる。そして、この賀毗礼峯の記述が次に述べるように「蛇の毗礼」に由来する地名説話であったとすれば、そのこと自体、この神が蛇神であることを物語っているのではないだろうか。

崇神紀十年九月条には、武埴安彦の妻・吾田媛が倭の香山の土を「領布」に包んで「是倭国之物宝」と呪言して云々、また、古事記によれば、天日矛の将来した八種の神宝の中に呪力を備えた「振浪比礼、切浪比礼、振風比礼、切風比礼」があるように、古代に於いて「ひれ」は呪力、霊力のあるものと考えられていた。そして、古事記の葦原志許男命の試練で須勢理比売命が葦原志許男命に授けたのは、霊力を持った「蛇の比礼」であった。

すなわち、「賀毗礼峯」の「毗礼」とは、前に見た立速日男命の持つ性格から言って、葦原志許男命説話と同様に、蛇の「毗礼」に由来し蛇の毗礼が呪力を持つという觀念に基づく崇拜であったのではないだろうか。

賀毗礼峯は、多賀と久慈の郡境にある神峯山（五九四メートル）で、五万分の一地図「日立」を見ると、その東五百メートルの所に「蛇塚」とあり、蛇神信仰のある所の通例のように、神峯山は西から南側を通って東へ富田川が流れ北側を西から東へその支流が流れている。

以上のような考察から、立速日男命は蛇神であると考えられ、この説話にはその神と民衆との対決を述べ、中央勢力によって征服された土着神としての蛇神の姿が見られる。

二

行方郡の条には、蛇神・夜刀神に関する二つの記述がある。一つは継体天皇の御世のことであり、もう一つはそれから十代後の孝徳天皇の御世のことである。各々の説話の大意は表に示す通りである。

継体天皇の世		孝徳天皇の世
1.	箭括の氏の麻多智が	壬生連磨が
2.		役の民を使って

9.	崇りのないことを祈った。	
8.	祀祭者となつて永代祭ることを約束して	
7.	山口から上を神の坐す所として社を建て	
6.	夜刀神を遂い	たちまち夜刀神は退散した
5.	を執つて	壬生連磨が皇化に従わない者はことごとく打殺すことを命じると
4.	夜刀神は群を率いてやって来て妨害した	夜刀神は池の上の椎株に昇り集まり妨害した
3.	郡の西の谷に耕田一十町余を開墾した時	郡の西の谷を占拠して池の堤を築いた時

ここに記された二天皇の御世の記述には、時代の経過と同時に蛇神に対する信仰の変化が見られる。

それは、麻多智の行なつた開墾は「耕田一十町余」という小規模なものであり、壬生連磨が行なつた開拓は天皇の地方政治施策として役の民を使って行なわれた公的な大規模なものであったところにも示されている通り、地方の土着勢力が中央勢力によって公的に征服されるようになったのである。

麻多智の時には武装せずには遂うことができなかったばかりか、祀祭者となつて敬祭することを誓つて崇りのないことを祈請してい

るように、その信仰は蛇神の崇りに対する恐れに発している。ところが、それから約百五十年後の壬生連のときには、このような蛇神に対する恐れは全くなっていると同時に蛇の蛇神としての靈力も衰えている。

三

那賀郡・茨城里の条に嘯時臥山の蛇神について次のように記されている。

努賀比古、賀努比売という兄妹があった。努賀比売は夜訪ねてくる姓名も知らない人と夫婦になり懐任して小さい蛇を産んだ。夜明けてから日中は物を言わないこの小蛇を兄妹は不思議に思い、神の子として祭場を設けて安置したが、その成長の速さに養育することができなくなり、子蛇に父の許へ去るように告げた。子蛇は父の所へ去るにあたって従者を望んだが、兄妹はこれに応じなかったため兄は震殺された。これに驚いた妹が投げた瓮が子蛇に当り、天に昇ることができずに嘯時臥山に留った。兄妹の子孫が社を建てて代々祭祀している。

この説話の場合にも、行方郡で麻多智が夜刀神の祀祭者となったのと同様、天に昇ることができずに峯に留った蛇神の崇りを恐れたところに祭祀の原因があったとみられる。一方、壬生連磨に屈服した夜刀神と同じように、瓮に当たったことによって蛇神の靈性がなくなつたのであるから、麻多智のときほど蛇神の靈威に絶対性はなくなつていことがわかる。

この神の性格で今まで述べた蛇神と異なる点は、群を率いていないこと、もう一つ大きな特徴は努賀比古を震殺したと語られ、雷神の性をあらわしていることである。

常陸国風土記逸文に次のような雷神の説話がある。

兄妹が田植えの早植え競争をはじめたが、田植えが遅かった妹は伊福部神の禍を被った。妹の死を恨んだ兄は雌雉の導きに從つて伊福部の石屋に寝ている雷神（蛇）を見つけ仇討ちしようとしたところ、神は服従を誓った。

この説話では蛇が雷神とされており、嘯時臥山の説話とともに、常陸国に於ける農耕民族の自然への恐怖から来る自然崇拜の説話として注目すべきものであろう。

次に、この説話は話のパターンとして記紀の三輪山伝説と同類であることが指摘できる。

崇神記には、三輪山の地名起源説話として次のように語られている。

毎夜訪ねてくる未知の恋人によって懐任した活玉依比売は、男の衣の裾に績麻を貫いて跡を辿ったところ、糸は三輪山に達し、三輪の神の子を妊んだことが判った。

崇神紀では、

大物主神の妻となつた倭迹迹日百襲姫命は、昼は見えず夜だけ訪れる大物主神の姿を見たところ蛇であった。その姿を恥じた大物主神は三諸山に去つた。

と語られている。

これと同型の説話は各地に伝えられているが、風土記に記されたものでは、肥前国風土記に例がある。

松浦郡・褶振峯の条に、

弟日姫子の許に晝になると帰り夜毎に通ってくる男の正体は、峯の頂上の沼に寝ている蛇であった。

という記述がある。

更に、この説話の終わりに、この蛇を盛った瓮と甕は今も「片岡村にある」と記されていることに注目したい。

これは、前に述べた賀毗礼峯の説話と関連があるのではないだろうか。

賀毗礼峯で立速日男命を屈服させそれを祭ったのは、中臣氏同族の片岡連であった。

新撰姓氏録、左京神別・天神に

中臣片岳連……大中臣同祖

とあり、大中臣は、

出自津速魂命三世孫天兒屋命也

とある。

その氏族名をその氏族の本貫地または勢力圏の地の名とするという考え方によれば、すなわち、片岡連が勢威をもった地が片岡村であったとすれば、この晡時臥山の説話も中臣氏族の語る伝承であったと思われる。そして、この二つの伝承が中臣氏族の語るものであったとすれば、東国において中臣氏の奉祀する鹿島の神、物部氏の奉祀する香取の神と同様の関係で、蛇神の征服説話が、物部祭祀集

団の族人、麻多智に征服された夜刀神の説話として物部氏族に語り伝えられたのではないだろうか。

夜刀神を征定した箭括の氏の家系は不明であるが、物部祭祀集団の族人と考えられている。

綏靖即位前紀に「矢部作箭」ある矢部は、新撰姓氏録、未定雑姓河内に、

矢作連……布都怒志乃命之後也

とあり、箭括の氏はその名称の意味の類似から、おそらくこの「矢作連」の同族と考えられ、布都怒志乃命は物部氏の祭祀する神であった。

四

以上が蛇神を祭祀したことを語る説話であり、その特徴は各々の項目で述べてきたが、その他に、この風土記に記された蛇神全体の性格として、注目すべき点を幾つか挙げてみたい。

第一に注目されるのは、夜刀神の説話でこの神は頭に角があると記されている点である。

これと同じことは、香島郡・白鳥里の条にも角折浜の地名起源として

昔、大きな蛇がいて、鹿島灘から太平洋に出ようとして浜に穴を掘ったところ角が折れて落ちた。

と記されており、蛇が蛇神として神格化され、しかも害を及ぼす存在として恐れられた場合、その頭には角があると考えられていたら

しい。このような考え方は、常陸国に限られていたようで他の風土記の蛇の説話には見当らない。

次に、田の開墾、池の築造に際して現われ、浜辺を掘り、また、瓮、杯等の水器に成長するというように、水に関連していることが注目される。これは、出雲の意宇川の付近に鎮座する熊野大神が農耕神として稲作の時期に現われ、水を司ったのと同様、特に夜刀神の説話には蛇が水神とされていたことが、はっきりうかがえる。

源氏物語研究

——口実の果たす役割——

桐壺巻の、光源氏を高麗の相人に見せる所は次のように書かれている。

そのころ、高麗人のまゐれるが中に、かしこき相人ありけるを聞き召して、宮のうちに召さんことは、宇多の帝の御誠めあれば、いみじう忍びて、この御子を、鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて、ゐてたてまつる。(一四三)四桐壺 引用は日本古典文学大系「源氏物

しかし、この風土記の場合には、頭に角があり、大海を渡ろうとする性格には蛇≠竜神というイメージが重なっているようである。最後に、これら常陸国風土記に記された蛇神説話全体について言えることは、無条件に蛇を崇めている話はないことである。

蛇神の祟りに対する恐怖に発した信仰もその蛇の蛇神としての神通力が衰えていく、いわば、蛇神信仰の衰退していく姿をこの風土記に見ることができる。
(第四回卒業生)

桐山はるひ

語」による。ローマ数字は巻数、漢数字は頁数を示す。以下これに従う)

来朝した高麗人の中に勝れた人相見がいたけれども、宮中には召せず、又帝の皇子が勝手に宮中の外に出る事も許されていなかった。のでやむをえず世間に対して右大弁の子という口実を用いて連れ出したものだが、社会的制約を破るためには他に手段がなかったものと思われる。又、薄雲巻に次のような文章がある。